

## 通信制高校教員のための要指導生徒を把握するシステムの提案

### Proposal of System to Grasp the Students Requiring Guidance for Correspondence High School Teachers

池田 大樹<sup>\*1</sup>, 山口 真之介<sup>\*1</sup>, 近藤 秀樹<sup>\*1</sup>, 大西 淑雅<sup>\*1</sup>, 池田 勇<sup>\*2</sup>, 西野 和典<sup>\*1</sup>  
 Taiki IKEDA<sup>\*1</sup>, Shin'nosuke YAMAGUCHI<sup>\*1</sup>, Hideki KONDO<sup>\*1</sup>, Yoshimasa OHNISHI<sup>\*1</sup>  
 Isamu IKEDA<sup>\*2</sup>, Kazunori NISHINO<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup>九州工業大学

<sup>\*1</sup>Kyushu Institute of Technology

<sup>\*2</sup>NPO 法人情報教育支援研究会

<sup>\*2</sup>NPOcorp Institute of Information Education Support

Email: o675003t@mail.kyutech.jp

**あらまし**：近年、通信制高校において、生徒層の変化などから教職員から生徒に対する新たな指導の手法の検討が必要となってきた。そこで、通信制高校の教職員が情報システムを活用し、円滑に生徒情報を把握することで、学校への登校回数が少ない通信制高校の環境下であっても、教育の質が保証できる環境作りを提案し、Moodle を用いて構築を行った上で、通信制高校の教職員向けに試用及び、生徒向けのシステム利用アンケートを実施し、その結果を考察する。

**キーワード**：通信制高校, Moodle, 生徒指導, 学習支援, コミュニケーション

#### 1. はじめに

通信制高校では、働きながら高校卒業の資格を得たい者が主に在籍していると社会的に認識されてきた。しかし、今日の通信制高校では、生徒の年齢層が若年化<sup>[1]</sup>してきた影響から、生徒層の多様化が進んでいる。加えて、最短の修業年数となっている3年間で卒業ができない者が増えてきている<sup>[2]</sup>。

本研究では、通信制高校の教職員が情報システムを活用して、要指導生徒を把握することで、円滑に指導が行える環境を構築するための手法について提案する。

#### 2. 通信制高校の課題と改善点

通信制高校の学習方法は、生徒が主に家庭で自律的にレポートを作成し、スクーリングと呼ばれる対面授業を年間20日程度受けながら、学習を行っていく。

通信制高校では、法律上教員一人あたりが担当する生徒の数が多いため、学校への登校回数が少ないため、個々の生徒に対してきめ細かい指導を行う事ができず、レポートの作成遅れにつながりやすいことから、図1のような卒業延期サイクルが生じている。

図1の卒業延期サイクルを防ぐため、通信制高校の教職員が学習状況の悪い生徒を早期に発見し、連絡や指導を行うことで改善が可能と考える。

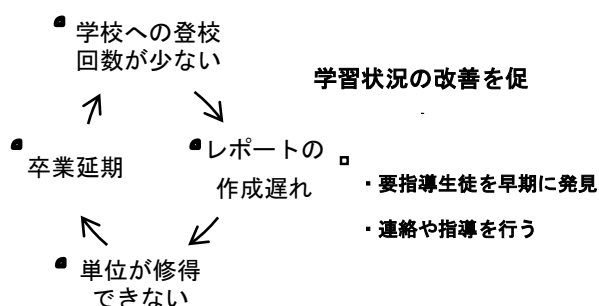


図1 卒業延期サイクルと改善策

#### 3. 研究手法とシステム構築

上記の改善策実現のため、図2のような情報システムの設計・構築を行う。

図2に示すように通信制高校では、複数の教職員が複数の生徒を指導しているため、教職員グループで生徒についての情報を共有する必要がある。そこで、教職員が、レポートの提出状況とスクーリング出席状況をシステムへ入力し、入力されたデータを元にシステムが学習の進捗状況をリスト等で示すことで、要指導生徒の把握を行いやすくする。生徒についても、自身の学習状況についてシステムを通じて、いつでも閲覧可能とする。

図2のシステム設計を基に、高等教育の現場で広く利用されているオープンソース型の学習管理システムである「Moodle」を用いてシステム構築を行う。

構築にあたって Moodle の基本機能の他に、出欠管理機能、学習進度表示機能、連絡機能を既存プラグインで追加する形で構築を行った。

図 3 は、構築した Moodle 画面の一例であるが、教職員権限で生徒の学習進度をリスト表示している様子である。

これらの追加機能を用いることで、通信制高校の教職員は、Moodle 上の科目一覧で生徒の学習状況を見ることが可能となり、生徒側も自身の学習状況についてスマートフォン等を用いて家庭から確認することが可能となる。また、システムを利用した連絡手段の構築が必要となる理由として、通信制高校では、スクーリング以外での連絡は電話が主であるため、連絡手段を増やすことでコミュニケーションの改善についても期待する。

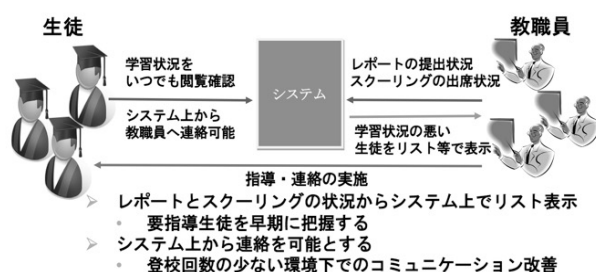


図 2 システム設計図

姓 / 名	最終アクセス	進捗バー	進捗
生徒 101	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 102	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 103	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 100	2015年 12月 18日(Friday) 15:00	✓	25%
生徒 099	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 096	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 097	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%
生徒 098	なし	✓ ✓ ✓	75%
生徒 104	なし	✓ ✓ ✓ ✓	100%

図 3 教職員画面  
(学習進度表示機能)

#### 4. 評価

実際の通信制高校である A 高等学校の教職員（教務主任、クラス担任、事務職員）3 名を対象に試用を行った。

構築した Moodle 上に模擬環境を設定し、3 名の教職員には、レポート提出状況確認・連絡機能・教材配布について、利用してもらった形で評価を行った。

構築した Moodle を試用した評価の結果「生徒の学習進捗状況が一覧で見られるため要指導生徒の把握が行い易くなる」、「システムを利用することで生徒との連絡手段が今までよりも増えるため、コミュニケーション改善も期待できるのではないかな」等の評価を得ることができた。

同時に、A 高等学校の生徒向けに、システム利用についてのアンケートを 200 部配布し、68 名の生徒より回答を得た。その結果、システムを利用して学習状況の確認を行いたいと回答した生徒は 76.5%であった。

また、システムを利用した連絡手段を可能にすることについては、67.6%の生徒が利用したいと回答している。

#### 5. 考察

提案したシステムを用いることで、通信制高校の教職員が、生徒の学習状況把握が行いやすくなる事に加え、コミュニケーションの改善についても期待ができると考えられる。また、通信制高校の生徒もシステムを利用し、学習状況の確認や連絡が行える環境を望んでいるという結果であったことから、生徒の学習管理に対する意識が高まる能性についても見出すことができた。

#### 6. おわりに

通信制高校の教員が、情報システムを用いて円滑に生徒指導を行える手法について研究を行った。

情報システムとして「Moodle」を用いて構築を行い、実際の通信制高校で教職員向けに試用と生徒向けアンケートの結果から、学習環境改善の可能性を見出すことができた。

今後、通信制高校で、生徒も含めた試験的な導入を行い、システムを利用した指導方法の有用性について検証を行っていきたい。

#### 参考文献

- (1) 尾場友和, 「オルタナティブな進路としての通信制高校: 入学者の属性と意識」, 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, Vol.60, pp.55-62, (2011)
- (2) 文部科学省, 「通信制高校の第三者評価制度構築に関する調査研究最終報告書 (山梨大学)」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakko-hyoka/05111601/1305977.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakko-hyoka/05111601/1305977.htm) (2015/07/06 アクセス)